

ネット依存を効果的に伝える方法についての一考察 ～教師の情報モラル調査を通して～

子どものネットリスク教育研究会専門委員会

E 部門「対策と取組」研究員 小杉 一浩

1 はじめに

最初に自己紹介をさせていただきます。私は元々中学校の保健体育教師で、今年の3月に福島県耶麻郡猪苗代町立猪苗代中学校を校長として退職し、現在は非常勤で週3日ほど桐の里で有名な三島町の教育委員会に勤めております。

養成協の公式インストラクターの資格を取得するきっかけとなったのは、2017年（平成29年）福島県PTA喜多方大会で、「メディア問題」について講演された大谷代表に声をかけていただいたことです。それまでも以前勤務した喜多方市教育委員会で私が「メディア問題」を担当し、養成協顧問であられる田澤雄作先生のご講演を何度も聴講する機会があり、子どもたちに情報教育の重要性を痛感していたという経緯もあります。現在はコロナ禍の影響でそれほど講演依頼は多くありませんが、地元の教育事務所や知り合いの校長に宣伝しながら、生徒や保護者を対象に講演を継続しているところです。

さて私が講演をするに当たり、現場の教師の思いや実態を踏まえることが重要と考え、以下の目的でアンケートを取りました。

- 1 現場教師の思いを加味した上で、児童生徒・保護者に効果的な講演活動ができるようにする。
- 2 GIGA スクール構想による教師の不安軽減の一助を担う。
- 3 ICT教育と情報モラル・リテラシー教育を両輪と捉えるよう教師の意識化を図る。
- 4 児童生徒に事前アンケートを実施することにより、現場教師へ参考情報を与える。

最終的には児童生徒・保護者・教師の心に響く講演会の実施を目指すことが大切と考えます。

2 教師アンケートの概要

内容は、できるだけシンプルに行い、答えやすいように配慮しました。（別紙資料1参照）

調査対象校：猪苗代町内小学校6校、中学校3校の教員

調査期間：2021年3月

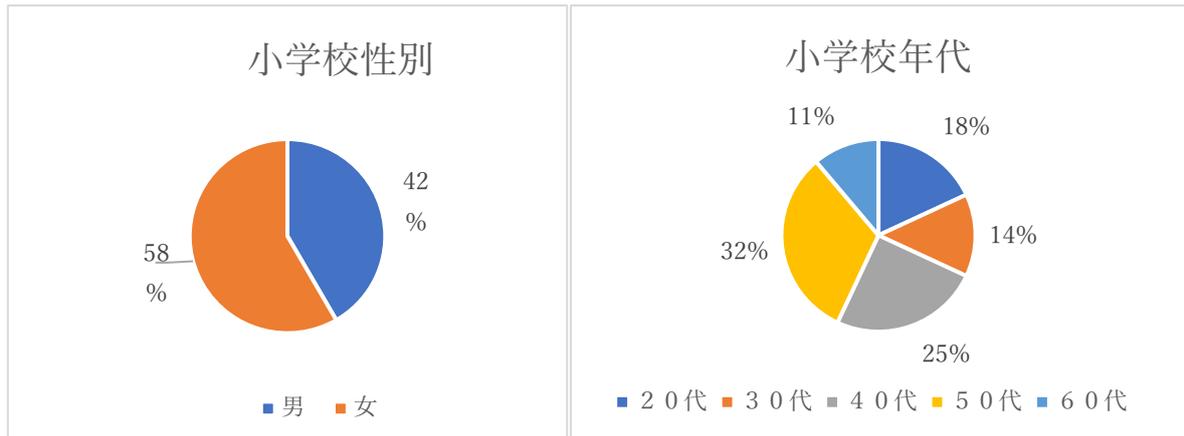
回答者数：小学校72名 中学校46名

まだまだサンプル数は少ないですが、今後講演等により増やす予定です。

（1）質問内容と結果ならびに考察

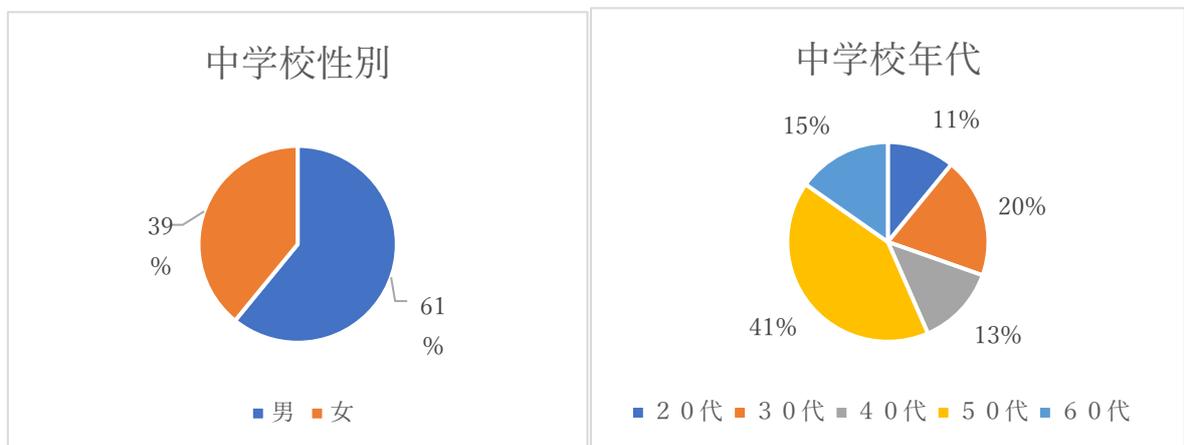
①—1 性別および年齢（小学校）

ミニ小論文



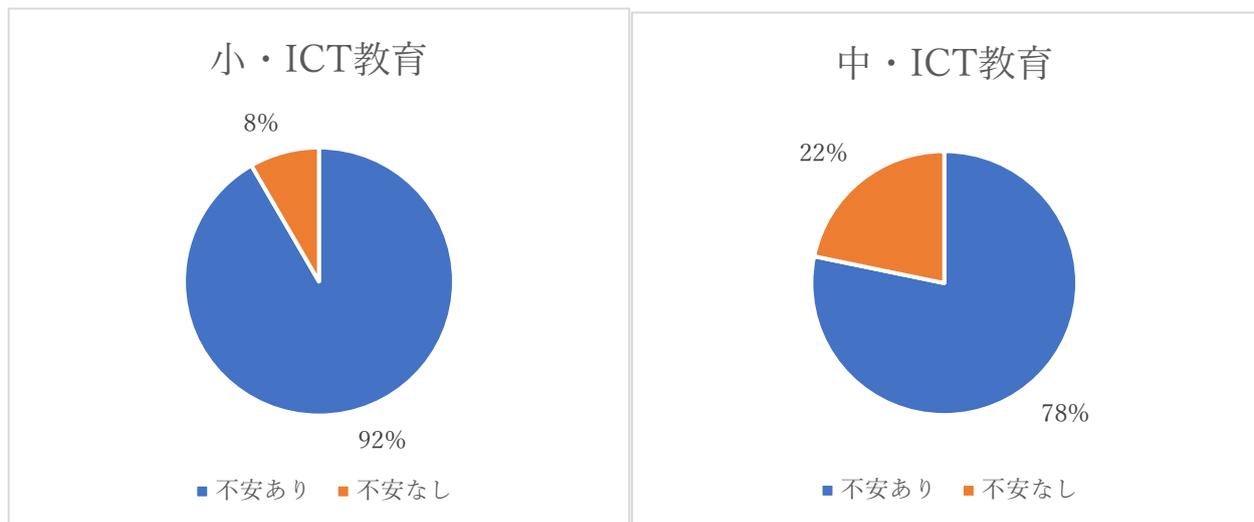
小学校は、6対4の割合で女性教員が多く40代以上の教員が7割近くを占めます。

①—2 性別および年齢（中学校）



中学校は、6対4の割合で男性教員が多く、50代以上の教員が半数以上を占めます。これは再任用で退職しても勤める教員が多いからです。

② ICT教育指導についての教師の不安度



ミニ小論文

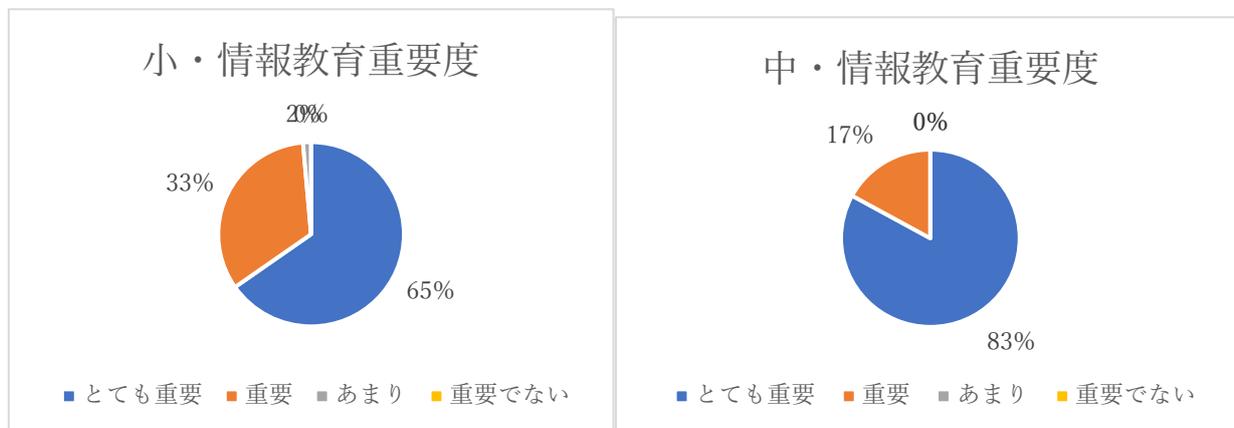
猪苗代町では令和2年度中に、全小・中学校の全児童生徒に「クロムブック」が配当され、業者による講習会が実施されました。講習会では、全教員対象に使用方法や授業での活用例が約4時間程度レクチャーされました。

その講習会実施後のアンケートによると小学校では9割以上、中学校では8割近くの教師が不安を抱えていることがわかりました。特に日本の生徒のICT利用時間はOECD加盟国の中で平均以下であり学校外での利用状況は平均以上です。つまり、学校で学習に関してデジタル機器はあまり使用しないが家庭ではネットやゲームで遊ぶことに日本の生徒は長けているのです。こうなると現場の教師のプレッシャーは並大抵のものではないと考えられます。

※ OECD 生徒の学習到達度調査 2018 年調査 (PISA2018) のポイント

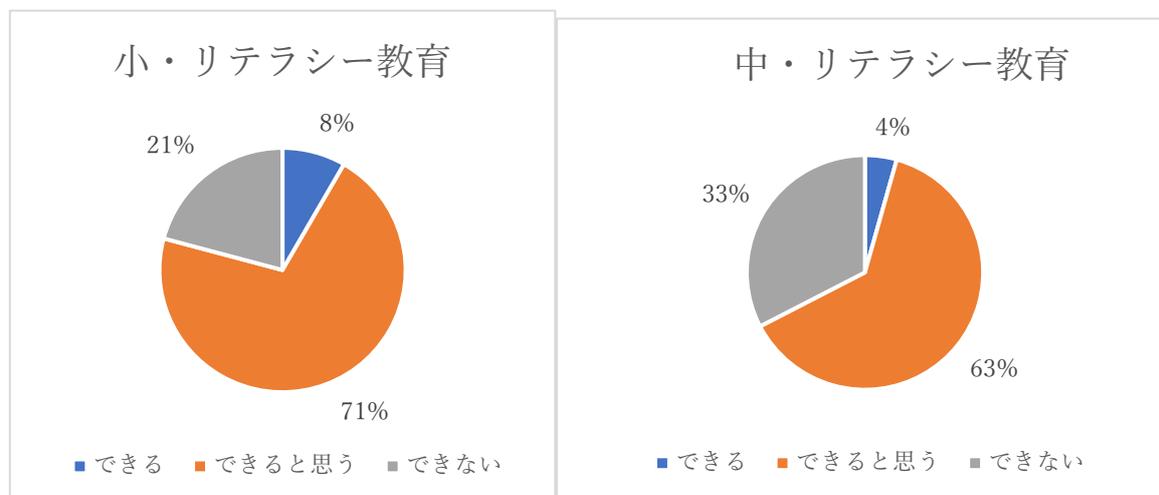
出典：文部科学省・国立教育政策研究所より

③ 情報リテラシー・モラル教育についての重要度



教師は小学校中学校にかかわらずほぼ全員、情報リテラシー・モラル教育が重要と考えています。特に中学校は、生徒のスマートフォン所持率が半数以上に上がっているため、重要度が増していると考えられます。

④ あなた（教師）は情報教育リテラシー・モラル教育指導ができるか



小学校では8割近くができると思え、中学校では7割弱ができると思えています。教育課程上に

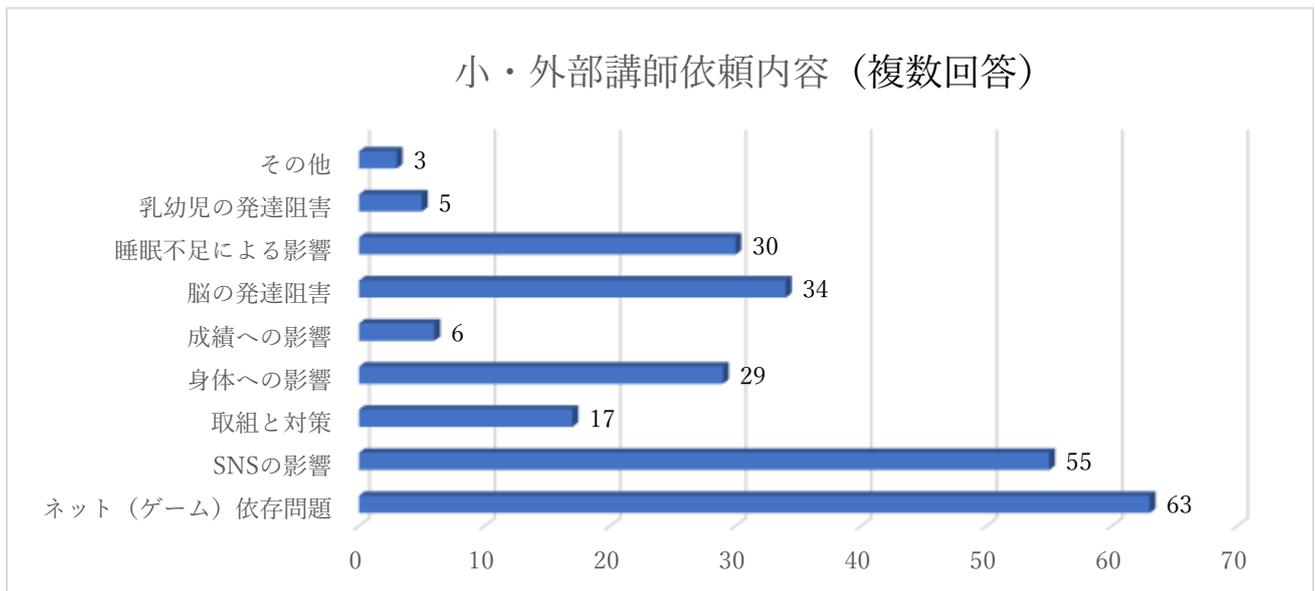
ミニ小論文

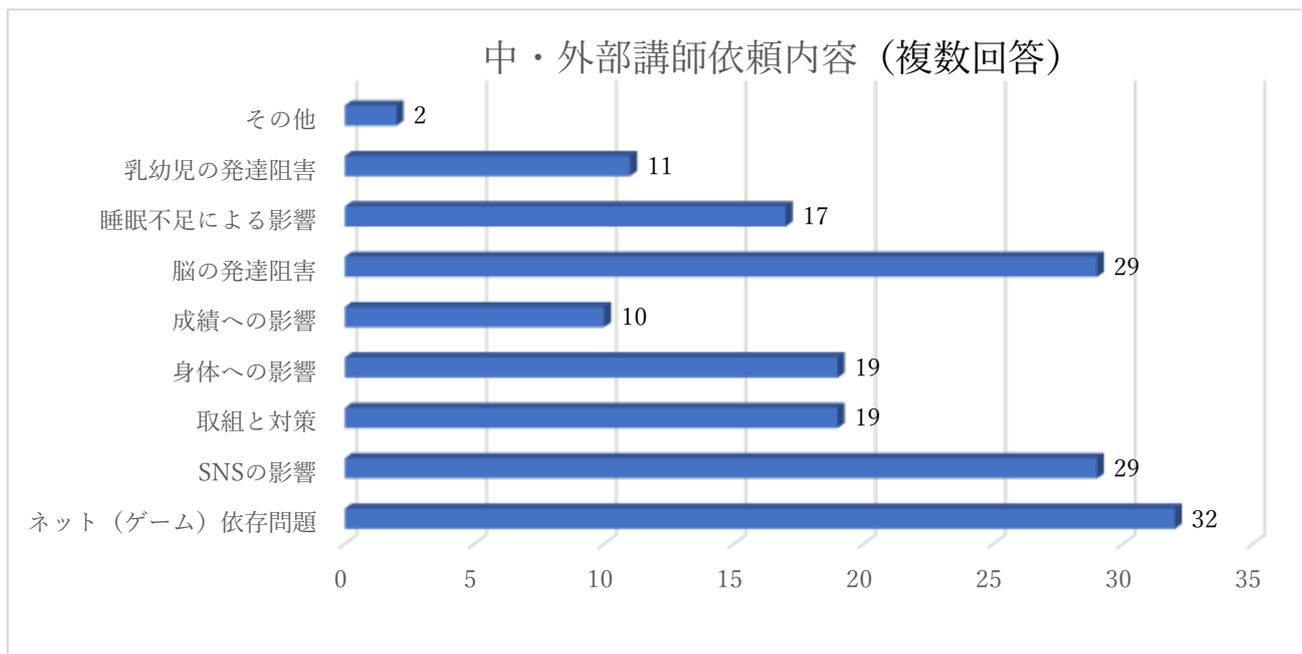
「情報教育」という分野で、教科や学級指導・道徳等で「情報教育リテラシー・モラル教育」がどの学校にも位置づけられています。しかしながら、その実践度となると内容や頻度に疑問を持つ自分もいるのも確かです。それは、筆者が校長として勤務した学校を見ているからに他なりません。

特に中学校では、生徒指導と絡め、全校集会や学年集会での通り一遍の指導になってしまったことは筆者自身の反省でもあります。そのため校長講話として全学級で出前授業を行い、特にネット健康問題に焦点を置き、生徒に「なぜ依存症になるのか」「脳に与える影響」「成績に与える影響」「視力に与える影響」「睡眠の重要性」等について話をしました。もちろん「個人情報」「誹謗中傷などの悪質な書き込み」「バイトテロ」などリテラシー・モラルに関する実例も併せました。この時の教師や生徒の反応は上々で、今後の講演の自信ができました。

実際今回のアンケートでは教師自身の指導内容やレベルまで言及していませんが、今後はより一層「情報教育」の重要性が増すと考えられます。

⑤ 外部講師に依頼する場合の希望する講話内容





ここでは現場教師が、もし外部講師に情報教育を依頼する場合どのような内容がよいか答えてもらいました。あえて、リテラシー・モラルに関する項目でなく「ネット健康問題」にしました。本来ネット健康問題啓発者養成全国連絡協議会の公式インストラクターの趣旨は、ネット健康問題を聴講者が理解し正しい知識を持ち情報媒体を活用することが大切と考えたからです。

小・中学校とも「ネット依存症問題」について一番多く、小学校では以下「SNSの影響」、「脳の発達阻害」の順となりました。中学校では、以下「脳の発達阻害」と「SNSの影響」がほぼ同じ依頼内容となりました。「成績への影響」が小学校中学校とも意外に少なかった印象です。

さらに情報リテラシー・モラル教育の重要性の理由について自由記述していただきました。（別紙資料2参照）今後、このことを踏まえ講話の内容を精選していきたいと考えます。

3 福島県の ICT 活用指導力の実態

福島県教員の ICT 活用指導力を「令和元年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果（文部科学省）」から見てみると、福島県の実態は下記ようになります。

・授業 ICT を活用し指導する能力	4 2 位	
・児童生徒の ICT 活用を指導する能力	3 8 位	
・情報活用の基盤となる知恵や態度について	3 3 位	
・ICT 活用指導力状況の研修受講教員割合	4 5 位	
・教材研究、指導の準備・評価・公務	4 2 位	※順位は都道府県別

この状況を見ると、福島県の ICT 指導は後進県と言えるでしょう。福島県の教員構成は小・中学校ともに 50 歳代の占める割合が高く、GIGA スクール構想に抵抗感があることが考えられます。

また、自分の指導法を容易に変えたくないことも推察されます。理由は高齢化だけではないと考えますが、福島県の教育委員会にとっては、早急に改善したい案件です。今後は、研修や ICT を活用した授

ミニ小論文

業研究会が増加し、教師の多忙化や「情報リテラシー・モラル教育」が後付けにならないことを祈るばかりです。

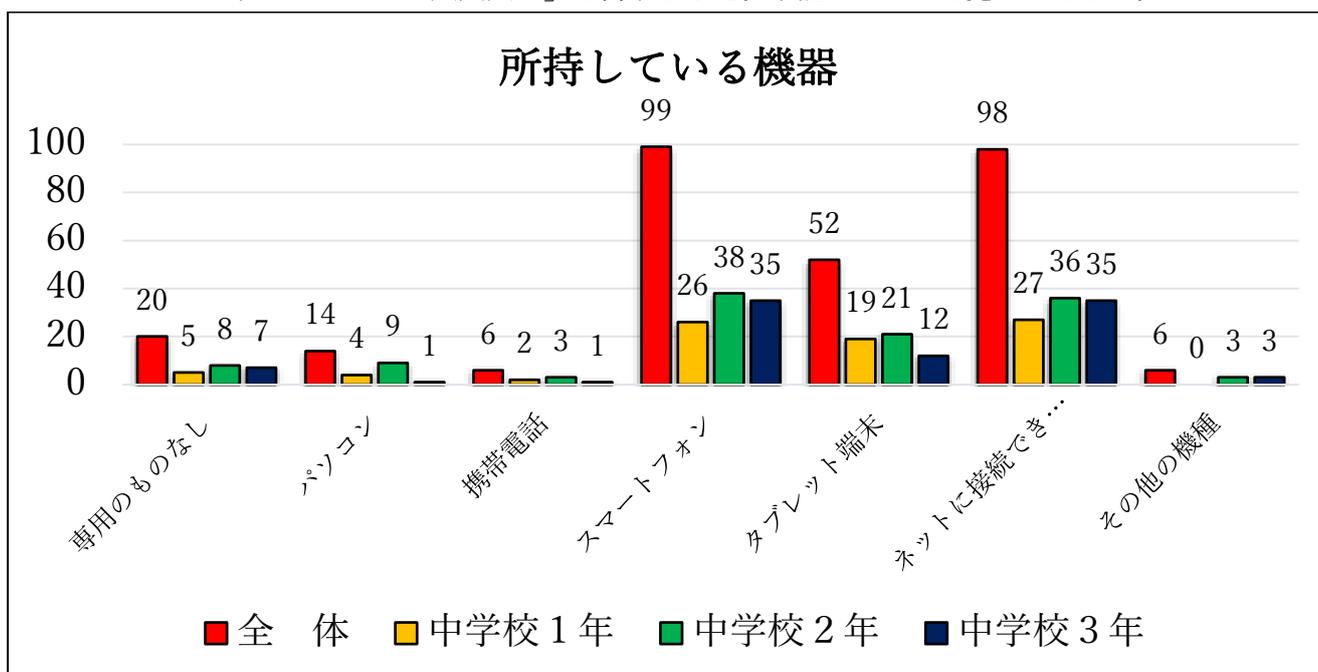
4 A 中学校での実践から

前述したアンケート結果や考察から、教師の思い、学校の実態を基に心に響く講演をするためにどのような内容を組み立てるかが大切です。以下は講演の基本内容です。

- (講演 題目) 「メディアの与える影響」
(サブタイトル) ～スマホって大丈夫?～
- 1 スマホの影響は? (現状は?) + 各校の実態
 - (1) WHO が疾病と認定
 - (2) スマホの使いすぎによる影響
 - ① 健康面
 - ② 成績面
 - (3) LINE や他の SNS による影響は?
 - (4) ゲームの与える影響
 - 2 今からあなたが始められること
 - 3 あなたの将来なりたい職業

現段階で、対象は中学生やその保護者がほとんどです。学校は、行事や教育課程の都合上、学期末保護者会等に抱き合わせで依頼することが多いようです。なお、筆者は中学校畑のため中学校ばかりの講演が多いですが、今後、小学校にも積極的に働きかけたいと考えています。

サブタイトルで、「スマホって大丈夫?」と掲げました。下記のグラフをご覧ください。

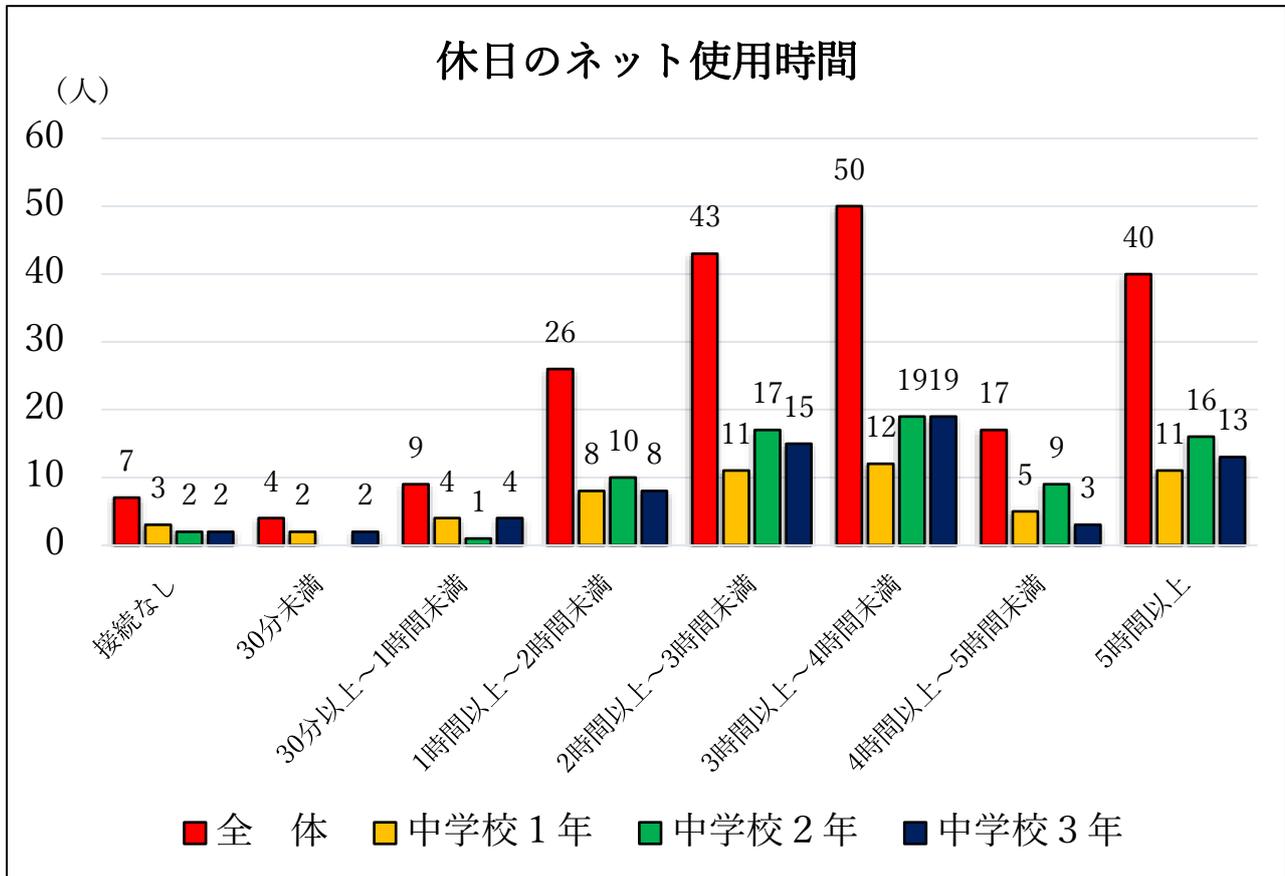


これは、200人規模のA中学校生徒の通信ができる機器の所持状況です。半数がスマホを所持して

ミニ小論文

いることがわかります。これが高校生だとほぼ100%になるでしょう。中には所持はしていないが、親や兄弟のスマホを借りて毎日操作している生徒もいます。よって今後所持率100%になるであろう「スマホって大丈夫?」としました。実際スマホの使いすぎによる視力への影響はとても危惧されます。

下記は休日のインターネット利用時間です。



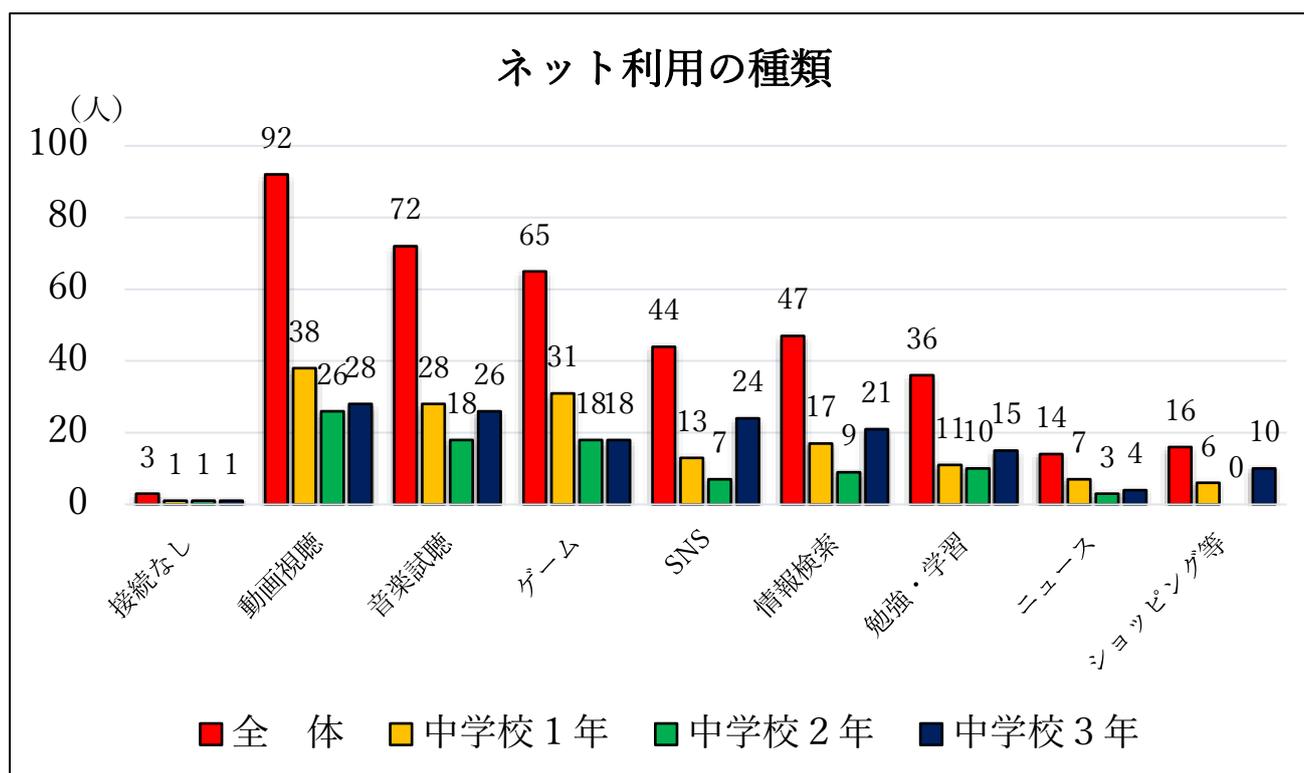
休日は6割近くの生徒が3時間以上ネットを利用していることがわかります。そして2割の生徒が5時間以上の利用になります。学年の格差もあまりないようです。

講演の流れは、各学校の実態を紹介後、ネット依存の簡易テストを行います。これは、『～心と体を蝕む「ネット依存」から子どもたちをどう守るのか～』国立病院機構久里浜医療センター院長 樋口進先生監修のチェックシートを利用し、生徒自身が依存傾向にあるか否かを自覚してもらうためです。

(別紙資料3参照) この「依存度チェック」により自己を振り返る効果が大きいようです。これを実施することにより、生徒は他人ごとではなく自分のこととして講演に集中し、参加できるように感じます。

ミニ小論文

下記は生徒のネット利用についてです。



講演をする上で、ネットでどのようなコンテンツを普段利用しているかを把握することも大切です。YouTubeなどの動画視聴が一番多いですが、もっと詳しいコンテンツの調査も事前に行うようにしました。

利用頻度が多いもの					
YouTube	LINE	グーグル	TikTok	Instgrm	フォートナイト
利用頻度が少ないもの（初耳なソフトまたはアプリ）					
荒野行動	アベマ	ネットフリックス	ハイアンドロー	アーク	デュエロ
探偵撲滅	初音ミク	SNOW	マイクラフト		

上記は、生徒からあげてもらった全てではありませんが、様々なアプリやゲームがあることに驚きます。せめて利用頻度の多いフォートナイトの内容は理解が必要と考えます。教師は日頃利用するLINEやYouTubeはわかりますが、ゲームを中心としたアプリに関しては疎いように感じます。さらにゲームによる課金やオンラインゲームによる交流も見逃せません。

講演では、実態や健康に与える影響だけの説明では知識の伝達に過ぎないと考えます。そこで具体的に今から始められることは何か。注意しなければならないことを提案しています。特に読書の奨励（東北大学教授川島隆太先生の「本の読み方で学力は決まる」より）や姿勢の維持を強調しております。

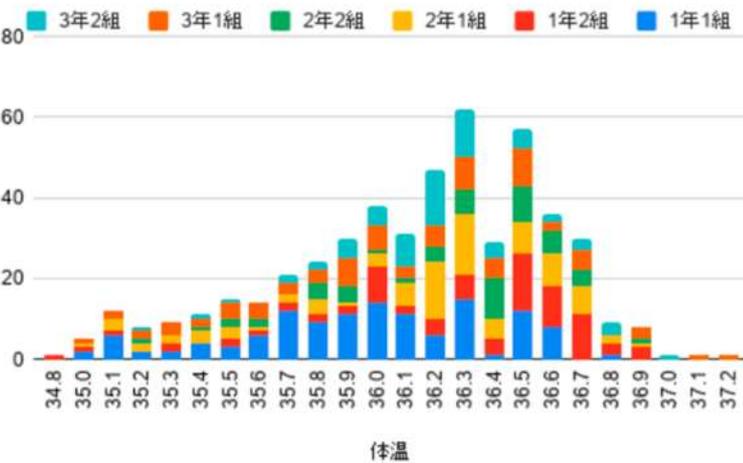
そして、講演の最後には、「あなたのなりたい職業」について触れています。「長時間のネット利用はだめなもの・依存症になると大変」ではその場限りで終わる講演になると考えているからです。児童生徒には、夢を持って今後生活することの大切さ、保護者には児童生徒にスマホ等の通信機器を持たせる

ミニ小論文

生徒氏名	測定日	05/23	05/24	05/25	05/26	05/27	05/28	05/29	総計
34.8							1		1
35.0								3	5
35.1				2					2
35.2				8	2				10
35.3	1	1	1	1	3	1	1		9
35.4			2	1			5	3	11
35.5	1		3	3	3	4			14
35.6		1	3	1	3	2	4		14
35.7	3		4	3	4	2	3		19
35.8			3			5	9		20
35.9	1	1	5	6	10	2	2	2	27
36.0	1		5	7	8	7	7		35
36.1	1	2	10	4	4	5	5	3	31
36.2		1	9	8	10	9	9	9	46
36.3	1		15	8	9	12	14	5	59
36.4	1	1	6	11	4	4	2	2	29
36.5	1	1	10	10	11	8	11	5	52
36.6	1		6	10	4	12	3	3	36
36.7		1	6	3	7	6	6	2	29
36.8	2		2	2			3		9
36.9			1		4	3			8
37.1					1				1
37.2							1		1

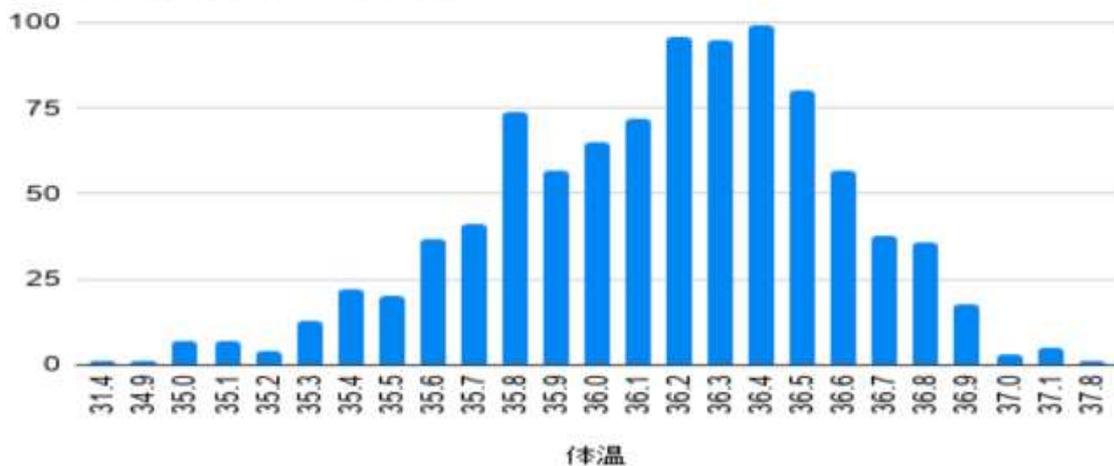
直近1週間の体温分布

5月23日(土)~29日(金)



体温記録の分布

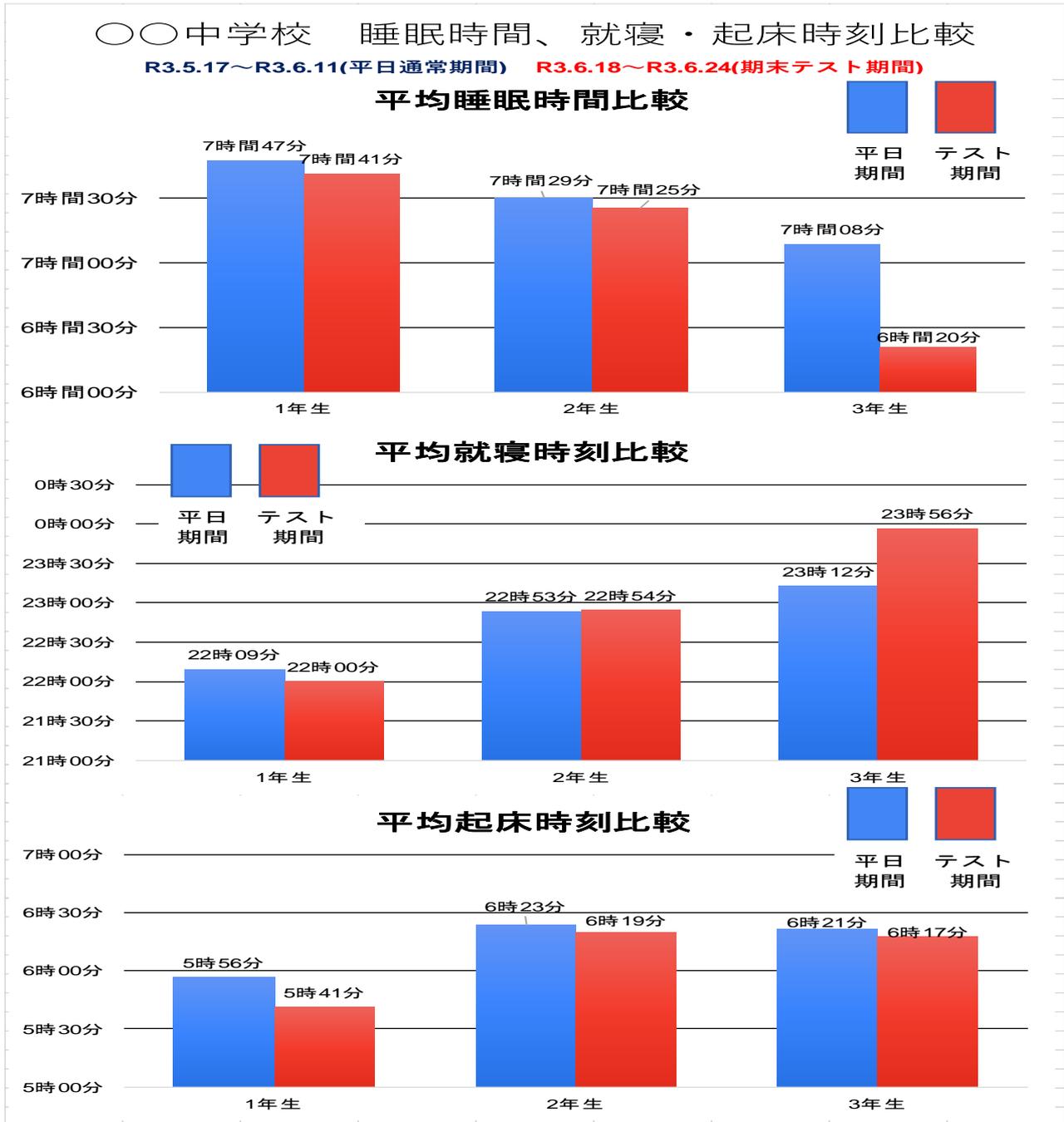
休業期間中(平日) 4/22-5/20



多くの先生方は、スマホの所持率やネット利用時間には注目します。加えて睡眠時間の確保や低体温についても注目すれば児童生徒や保護者へのアプローチも変わり説得力も増すと考えます。

また、スマホ等の端末を長時間使用すれば睡眠時間の短縮化は避けられないことを強調し、福島県教育委員会スポーツ健康課に働きかけながら、睡眠時間の調査や体温調査も依頼できればと考えております。実は福島県は肥満出現率に関しても ICT 指導同様ワースト上位です。睡眠時間短縮＝肥満出現率増を示すことができればと考えています。

次にある学校の取組を紹介します。下記グラフは、生徒の睡眠時間・就寝時間・起床時間を毎日、生徒の持つ「クロムブック」に入力させ集計したものです。この学校の校長は睡眠確保が特に重要と考え、睡眠時間の短い生徒に直接指導を行っています。このような取組紹介も併せて行っていければと考えます。



最後になりますが、先日講演した学校の代表生徒が「今まで何度かメディアに関する学習会を聴いてきましたが、今回はなぜスマホの使いすぎが悪いのか理由が明確にわかったのでとても勉強になりました。今後は十分注意し生活したいです。」と答えてくれました。この言葉をきいてとてもうれしく感じました。今後も養成協公式インストラクターとして心に響く講演を目指します。